

函館市川汲台場の調査

箱館戦争戦跡調査プロジェクト

野村祐一, 塚田直哉, 櫻井宏樹, 石井淳平

2020 年 12 月 6 日

概要

北海道の南西部、函館市湯の川から川汲町へ抜ける山中の台場山（491m）山頂に、箱館戦争にともなって構築されたと伝えられる塹壕が知られている。築城時期は箱館戦争時と伝えられるものの、築城主体や具体的な築城時期は不明である。

本調査では「川汲山道」を挟む南北の尾根を踏査し、新発見 11 箇所を含む 12 箇所の塹壕の測量調査を実施した。

1 川汲台場及の位置

川汲台場は函館市湯の川と同市川汲を結ぶ川汲峠周辺尾根に所在する。汐泊川上流の日本海と太平洋側の分水嶺を形成する尾根の鞍部を川汲旧道がとおり、これを南北に挟むように尾根上に塹壕群が所在する。標高 491m の台場山から NHK 電波塔付近までの尾根上で 11 基の塹壕を確認した。

2 文献に見る川汲台場と築城主体

2.1 明治元年

『南柯紀行』

土方歳三は右両隊を率いて川汲嶺に向い、川汲村の温泉上に至りし処、的一小隊計も出張の由なれども、格別の戦争にも及ばず峠下まで引揚げしを、追躡して嶺上を乗取り斬獲あり、夫より湯の川まで下り来りたり、額兵隊先頭に進み功績ありし由なり。

『蝦夷之夢』（今井 1998）

ことに河汲峠は巍々たる高山にて木を攀じ石を抱いて山路を進むに、他に深く積雪数丈、実に一夫之を守って万夫難進の天嶮なり。然るに敵兵嶮を頼み焚き火を囲んで只暖を防ぎ、吾兵の迫るを知らず。一撃、狼狽し谷に転じ岩に躓ずき傷者を扶けず、散々となりて箱館に走る。

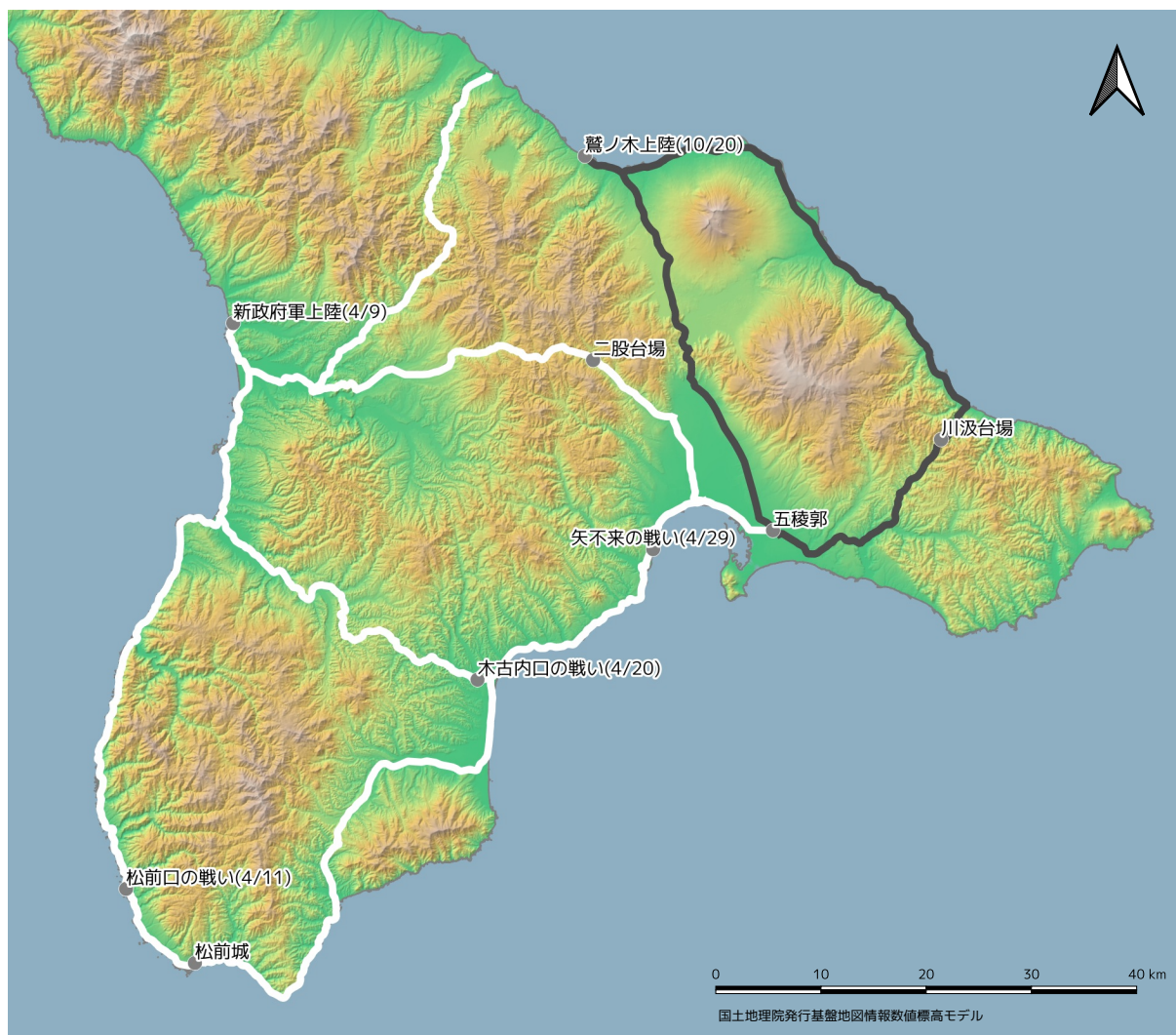


図 1 川汲台場の位置と箱館戦争

2.2 明治 2 年

『南柯紀行』（大島 1998）

四月五日、午後官軍艦五隻青森港より出て、相續きて箱館山の後に回りしにより、何れも海岸防禦の備を為し、敵艦多分鷺ノ木并に川汲へ上陸すべしと察したれば、直ちに右兩処に報知したり、然るに右軍艦忽ち方向を転じ乗返し内地の海岸に沿ひ青森の方へ退きたり。

『北国戦争概略衝鋒隊之記』（今井 1998）（『衝鋒隊戦争略記』（須藤ほか 1996）も同内容の記述）

白尻、河（川）汲ハ箱館ノ裏道ニテ尤モ要所ナレバ、五ヶ所ニ砲台ヲ築キ今井信郎中隊ヲ率ヒテ成ル。

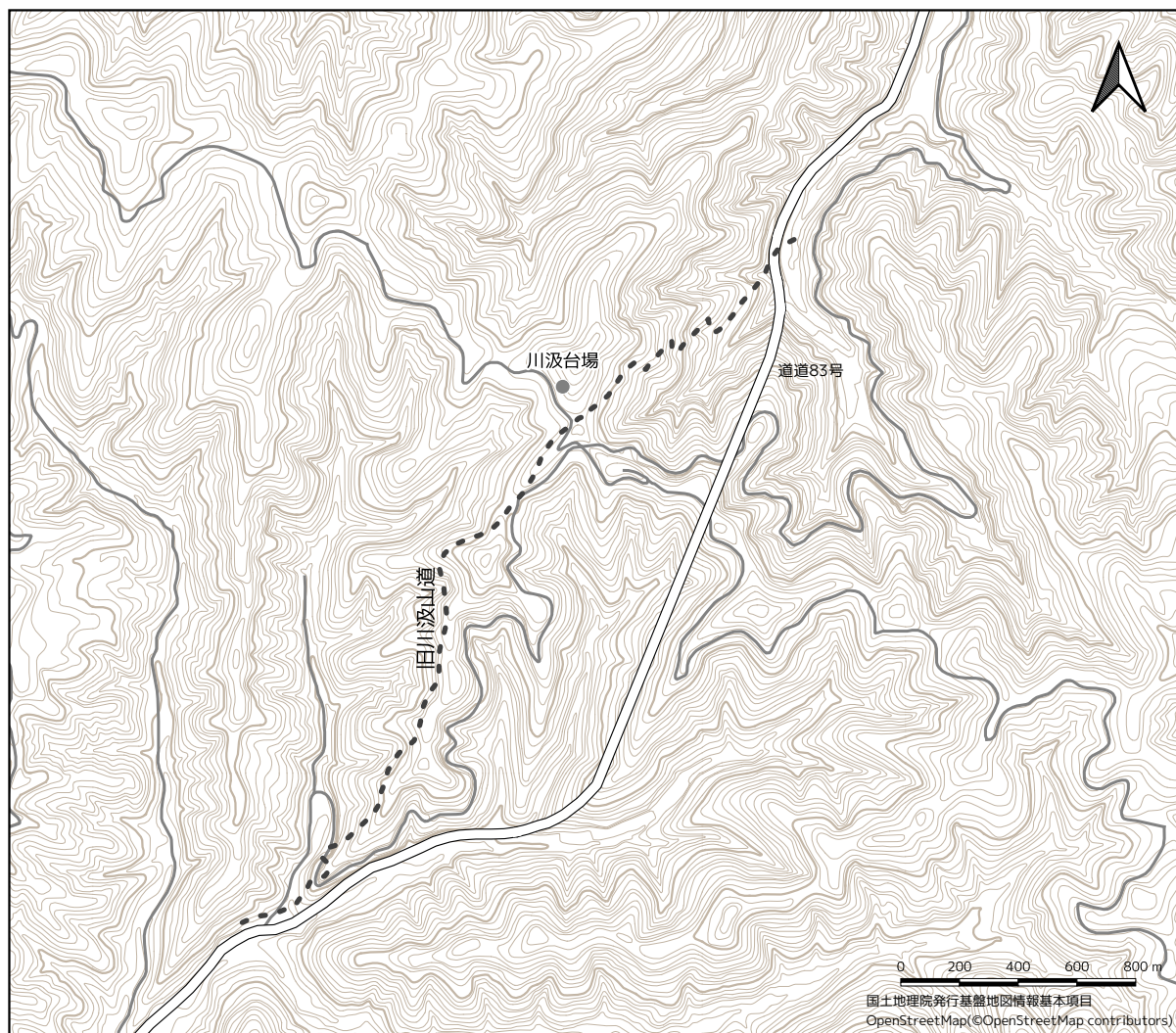


図2 川汲峠と川汲台場

『函館戦記』（須藤ほか 1996）（著者不明、彰義隊隊士とされる）――

衝鋒隊ハ鷲ノ木・森・尾白内・掛間・砂原・鹿部・熊泊・尻（原文ママ）・河汲・ヲシヤマンベ・尾札部等ヲ戍ル。

2.3 郷土史等

『北海道史蹟名勝天然記念物調査報告』（河野 1924）――

亀田郡湯川村大字亀尾村と茅部郡尾札部村字川汲との間川汲嶺にある臺場にして幕府脱走軍が築造したるものなりと云ふ（中略）

七 形状寸尺塔 形状は凹形にして凡二間余

九 由来徴證 戊辰の役榎本武揚、杉平太郎等出張し川汲温泉宿に宿泊し尾札部村各部落より人夫を徴発し親しく工事を監督し築造したりと云ふ

『南茅部町史年表』（小林 1967）

台場は川汲峠山上海抜五〇〇メートルに更に一〇メートルの土盛、この上に高さ二メートルの堤を直径六メートルの円形に巡らし、中央凹所に砲架を設け、青銅製大砲四門を備えた。そして山上から四辺の森林を伐採して展望を広くし、遥かに箱館山を望み、後方太平洋をほしいままに眺め得るようにした。之に要した人夫雑役は、白尻・川汲・尾札部・木直より徴用した約一〇〇名で、一月上旬より翌二年四月上旬竣工まで、冬季極寒大雪期（約二ヶ月）を除いた外懸命に工事を急いだ。外に川汲山道入口左側台地にも一か所小台場を築いた。

2.4 文献から推測する川汲台場築城主体

川汲峠での実際の戦闘は明治元年に砂原経由で川汲峠を越えた土方隊（「陸軍隊」、「額兵隊」など約500名）と箱館府兵によるものである。土方隊の攻撃が奇襲攻撃となり、箱館府兵は満足な応戦ができずに敗走している。記録類からは、このとき、箱館府兵が陣地を構築していた様子は確認できない。

翌明治2年の記録では、衝鋒隊が川汲峠を含む太平洋側の守備を担当したことがわかる。『北国戦争概略衝鋒隊之記』では5箇所に砲台を築いたとされる。現地で確認した塹壕の数とは一致しないが、衝鋒隊が川汲山道に何らかの陣地構築を行ったことがうかがえる。

『北海道史蹟名勝天然記念物調査報告』、『南茅部町史年表』はいずれも川汲台場の築造主体を「榎本軍」とする。町史年表にみえる「一〇メートルの土盛」は K07 や K08 などと相当するものと推測され*1、また、「高さ二メートルの堤を直径六メートルの円形に巡らし」は K01 に相当するものと考えられる。

河野の調査は箱館戦争終結から53年後の大正11年（1922）に行われており、当時を知る人物からの聞き取りを行ったものと考えられる。築城主体に関する聞き取りの精度は高いと考えられる。

以上のことから、本台場は明治2年に旧幕府軍によって構築された陣地の一部である可能性が極めて高い。

3 研究史

川汲台場の学術的記録は前出の河野常吉による大正11年調査である。ただし、河野は現地を実見しておらず、もっぱら聞き取りによって調査報告を記載している。

城郭研究者の八巻孝夫は2013年に川汲台場を踏査し、川汲山道北側尾根の塹壕群を中心に縄張り図を作成した（八巻2017）。縄張り図に記載されている塹壕は本調査の K01、K04、K05、K07、K08 に相当するものである。また、台場山北側尾根にある本調査では塹壕に認定しなかった2つの塹壕を加えている。

*1 K07 及び K08 はそれぞれ延長25mを超え、町史年表の記述とは完全には一致しない

4 調査の経過

表 1 調査記録

期日	参加者	内容
4 月 12 日	野村祐一、塚田直哉、石井 淳平	川汲峠周辺の踏査と塹壕の確認
5 月 4 日	野村祐一、塚田直哉、熊 谷友良、桜井宏樹、石井 淳平、石井遼平	川汲台場 K01、K02、K03、K04、K05、K06、K07、 K08 の測量調査
5 月 17 日	野村祐一、塚田直哉、森定 広、熊谷友良、桜井宏樹、 石井淳平、石井遼平	川汲台場 K09、K10、K11、K12 の測量調査及び K01 ほか空撮

5 塹壕配置と概要

川汲山道を挟む尾根上で 11 基の塹壕を検出した。

このうち、川汲山道の北側に位置する台場山山頂に K01、台場山山頂と川汲山道までの尾根に K02～K06 の 5 箇所の塹壕がある。川汲山道を挟むように K07 と K08 がある。2 つの塹壕は延長 25m を超え、川汲台場中最大の塹壕である。川汲山道南側尾根には K09～K11 の 3 箇所の塹壕がある。南側尾根最高所の K11 の南東にも尾根は続いているが、NHK の電波塔が建設され、当該箇所の塹壕の有無は確認できない。

台場山山頂から川汲山道とは反対の北へ下ったところに K12 がある。

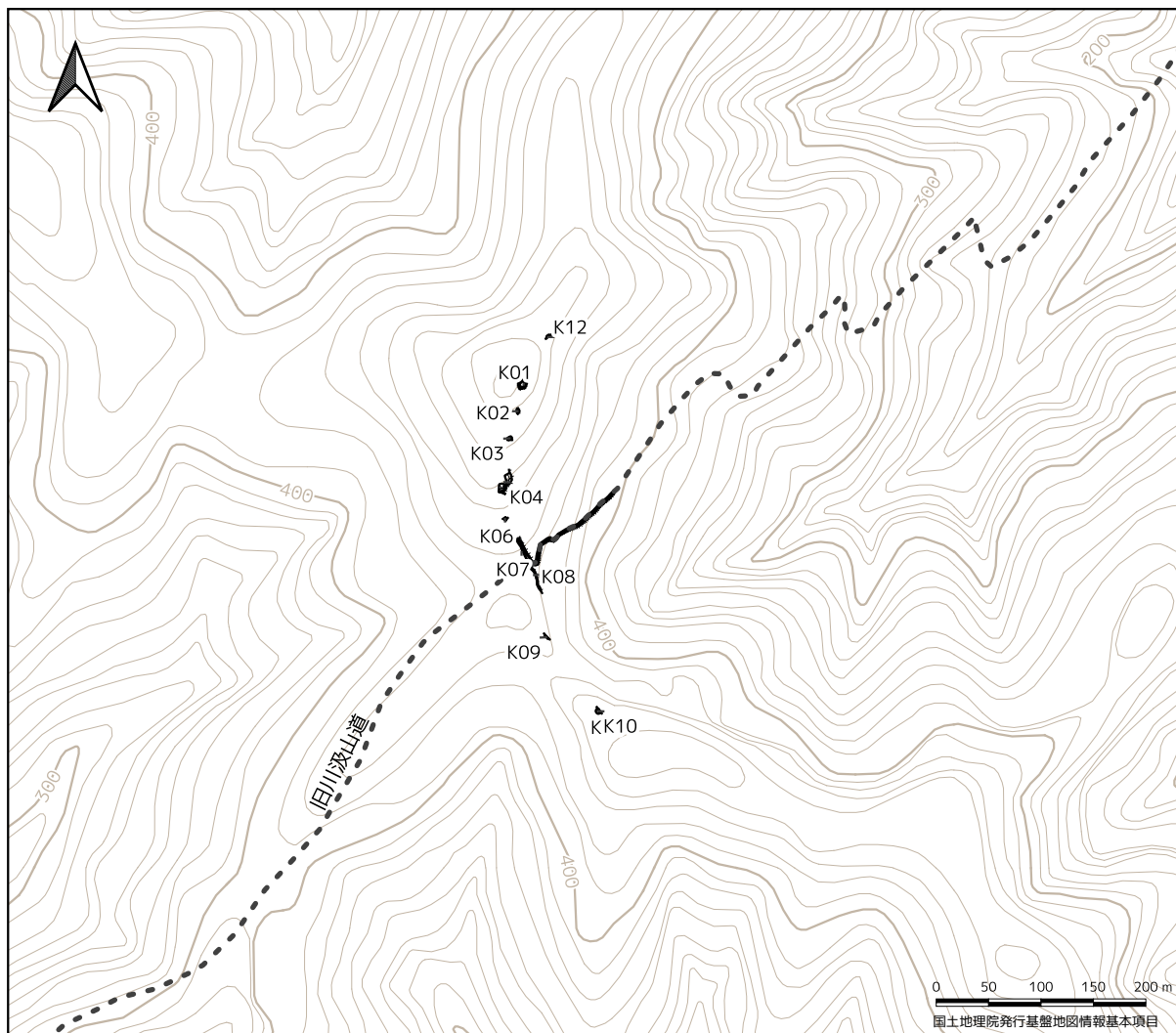


图 3 川汲台場検出塹壕位置図

表 2 塹壕一覧

名称	下端延長	下端幅	主方位	所見
K01	5.51	4.39		台場山頂部に構築された平面五角形の塹壕。
K02	3.47	0.99	89.9	K01 直下に構築される 2～3 人用の小規模塹壕
K03	3.61	1.74	158.1	K02 から尾根を約 25m 下がったところに構築される 2～3 人用の小規模塹壕。土塁の構築方向は尾根の方向と一致する。
K04	5.49	2.17	126.7	K05 と接して構築される。土塁の構築方向は南東方向である。
K05	5.71	1.82	144.8	K04 と接して構築される。土塁の構築方向は尾根の方向と一致する。
K06	2.44	1.12	120.6	K05 と K07 の中間地点に構築される 2～3 人用の小規模塹壕
K07	25.66	1.23	58.9	K08 と対になり川汲旧道を挟んで構築される長大な塹壕
K08	27.13		74.1	K07 と対になり川汲旧道を挟んで構築される長大な土塁。溝状の掘り込みはなく土塁のに南西側は平坦面が広がる。
K09	4.47		46	掘り込みを持たず土塁のみが構築される。2～3 人用の小規模塹壕。
K10	4.93	2.1	56.7	半円形の掘り込みに土塁が構築される。2～3 人用の小規模塹壕。
K11	5.18	2.46	-9.6	2～3 人用の小規模塹壕。塹壕群の最東部に位置する
K12	2.69	0.6	-38.4	他の塹壕とは台場山山頂を挟んで位置する。2～3 人用の小規模塹壕。

6 可視領域

6.1 K01

K01 は台場山の山頂に位置し、川汲山道南北両側の尾根に視界が効く。川汲方面全体の眺望はこの塹壕がもっとも優れている。

6.2 川汲山道北側塹壕群

本塹壕群（K02・K03・K04・K05・K06）は川汲山道北側尾根線と南側尾根の川汲方面に視界が効く。川汲山道南側には K09～K11 の 3 箇所の塹壕が検出されており、本塹壕群はこれら南側塹壕群とその北東斜面を視界に入れる。本塹壕群の主たる機能は、川汲山道南側塹壕群の北東側斜面に対して側面から支援するものと推測する。

また、K03 や K05 では、土塁構築方向が南側、すなわち北側尾根のフォールラインに向けて構築されており、川汲台場前面（東側）だけでなく、川汲山道正面塹壕（K07・K08）が突破された場合の第

二線陣地としての機能が想定される。

6.3 川汲山道正面塹壕群

本塹壕群（K07・K08）は、川汲台場で最大の塹壕である K07 と K08 により川汲山道を挟んで構成される。川汲山道を中心とした狭い範囲に可視領域が限定されることから、川汲山道正面防禦が本塹壕群の主たる機能と推測する。また、北側尾根、南側尾根の東側にも視界が効き、川汲山道北側塹壕群や川汲山道南側塹壕群を攻撃する敵に対して側面射撃が可能な位置取りとなっている。

6.4 川汲山道南側塹壕群

本塹壕群（K09・K10・K11）は川汲山道に対して広範囲に視界が効く。主たる攻撃路である川汲山道を側面から射撃するとともに、正面塹壕群や北側塹壕群への攻撃に対して側面射撃を行う機能も期待されたと推測する。本塹壕群から距離 400m 圏内に川汲山道の延長約 360m が含まれ、川汲山道上の的を長時間射程に捉えることが可能である。

7 まとめ

7.1 川汲台場の築城主体

新政府軍、旧幕府軍のいずれの主体による築城の可能性も残されるが、明治元年の川汲峠での戦闘においてここを守備する箱館府兵が満足な抵抗もできずに敗走していることは、上述したように具体的な戦闘プロセスを想定して構築された川汲台場の築城主体として、箱館府兵を想定することはむずかしい。

旧幕府軍の構築したことが明らかである二股台場では主攻線となる山道を側面射撃の組み合わせによって封殺している様子が明らかとなっている（石井ほか 2020）。二股台場の防禦構想も川汲台場のそれと共通で、施条銃の特性を活かした散開陣地による側面射撃を基軸とするものである。また、二股台場防衛の主力の一角を担った衝鋒隊が川汲台場を含む当該地域の守備担当となっていることも、川汲台場と二股台場の共通性を説明する有力な状況証拠である。

以上のことから、川汲台場の築城主体は旧幕府軍であり、明治 2 年の新政府軍の侵攻に備えて構築されたものと推測する。

7.2 側面射撃の組み合わせを基軸とした塹壕配置

川汲台場の特徴は、塹壕群同士が側面射撃によって互いに援護し合う仕組みが徹底されていることである。

特に北側塹壕群と南側塹壕群では直下の尾根を登坂する敵に対して直接攻撃を行うことが難しい位置に塹壕が構築されている。すなわち、各塹壕が直接敵と対峙するのではなく、互いに他の塹壕群の側面支援を行うべく配置されている。唯一、川汲山道正面塹壕群のみは川汲山道を侵攻する敵に対して正面から対峙する位置関係にあるが、有効な射角を確保できる区間は短く、大軍による飽和攻撃には脆弱と考えられる。こうした弱点を補うために、川汲山道に対して長く有効な射角を確保できる南側

塹壕群や K01 塹壕が構築されたのであろう。

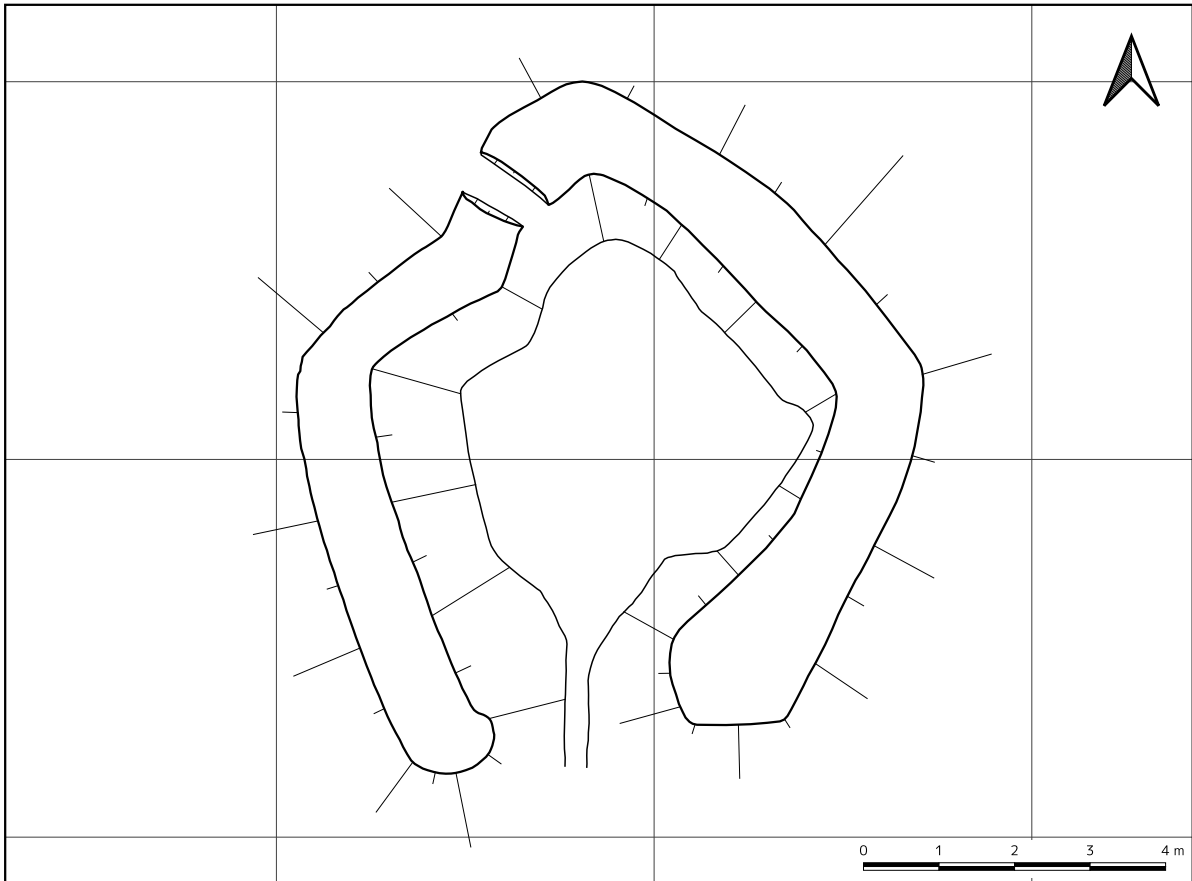
このような側面射撃の組み合わせによる防禦構想は、後に日本軍が定式化する「反斜面陣地」（昭和 19 年 10 月示達『上陸防禦教令（案）』第 41 条）の発想に近い*2。川汲台場は反射面陣地のような縦深的な陣地構造とはなっていないものの、その全域において、側面射撃を主たる防禦射撃とした陣地構築がなされている。このような側射を防禦射撃の基礎とする陣地は、各塹壕守備側からみると自塹壕正面の敵に対しては他塹壕の支援を頼りにするほかなく、自塹壕正面に対する視界が限られていることとあわせて、各塹壕の孤立感が高いとされる（樋口 2018）。すなわち、それぞれの塹壕の守備兵が各塹壕の機能を理解し、相互支援に対する高い信頼を有することが不可欠となる。川汲台場は、そのような高い信頼を個々の塹壕守備兵が有することを前提とし、各塹壕が築城主体の意図どおりの役割を果たすことではじめて川汲台場全体の防衛が可能になる塹壕配置といえる。

川汲台場は施条銃の高い命中率と長い射程を活かした野戦築城であり、戊辰戦争を通じて獲得した当時の軍事技術を具現化した遺構として、北斗市二股台場と並んで、当時の軍事技術の到達点を示す貴重な箱館戦争戦跡である。

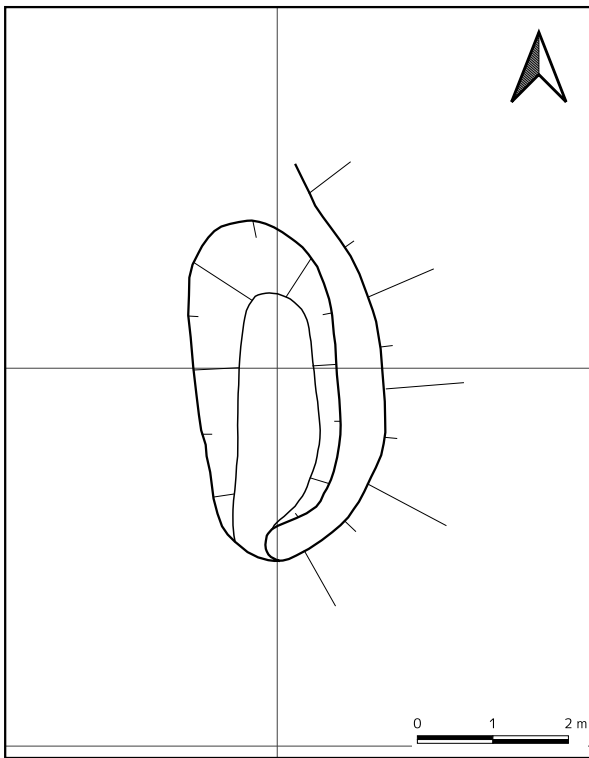
参考文献

- 石井淳平・野村祐一・塚田直哉・時田太一郎 2020「北斗市二股台場の測量調査-箱館戦争戦跡の考古学的調査-」『北海道考古学』第 56 輯,pp.35-54
- 今井信郎『北国戦争概略衝鋒隊之記』,1998『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社,pp.159-184
- 今井信郎『蝦夷之夢』,1998『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社,pp.186-228
- 今井信郎『衝鋒隊戦争略記』,須藤隆仙編著 1996『箱館戦争史料集』新人物往来社,pp.80-86
- 大島圭介『南柯紀行』,1998『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社,pp.230-258
- 河野常吉 1924『北海道史蹟名勝天然記念物調査』,北海道立図書館所蔵,1974 年復刻版『北海道史蹟名勝天然記念物調査』名著出版,pp.61-62
- 小林露竹編 1967『北海道渡島南茅部町史年表』南茅部町教育委員会
- 樋口隆晴 2018「第十一章 ノモンハンの戦い 金井塚大隊の帰還-歩兵第六十四連隊第三大隊の防禦と退却」『戦闘戦史-最前線の戦術と指揮官の決断』作品社,pp.227-253
- 八巻孝夫 2017「箱館戦争の台場-道南・東部と函館周辺の野戦築城を中心に」『中世城郭研究』第 31 号

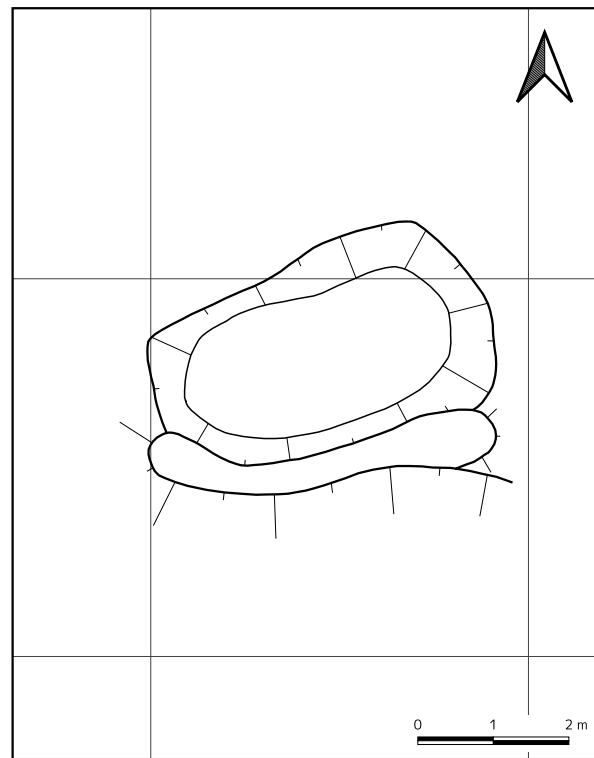
*2 反斜面陣地は縦深陣地の一種である。丘陵等の遮蔽物の背後に砲兵部隊を配置し、歩兵部隊も同様に遮蔽物背面に築陣する。敵側からみて遮蔽物正面の防禦は遮蔽物背後の砲兵による曲射と、隣接する火点からの側面射撃が対応する。守備側からみると、防禦正面の丘陵に対する視界は狭く、敵を視界に入れた時点では接近戦を強いられることとなる。自陣正面に対する有効射撃領域が狭いため、他の火点からの支援が前提の築城手法である。



K01平面図



K02平面図

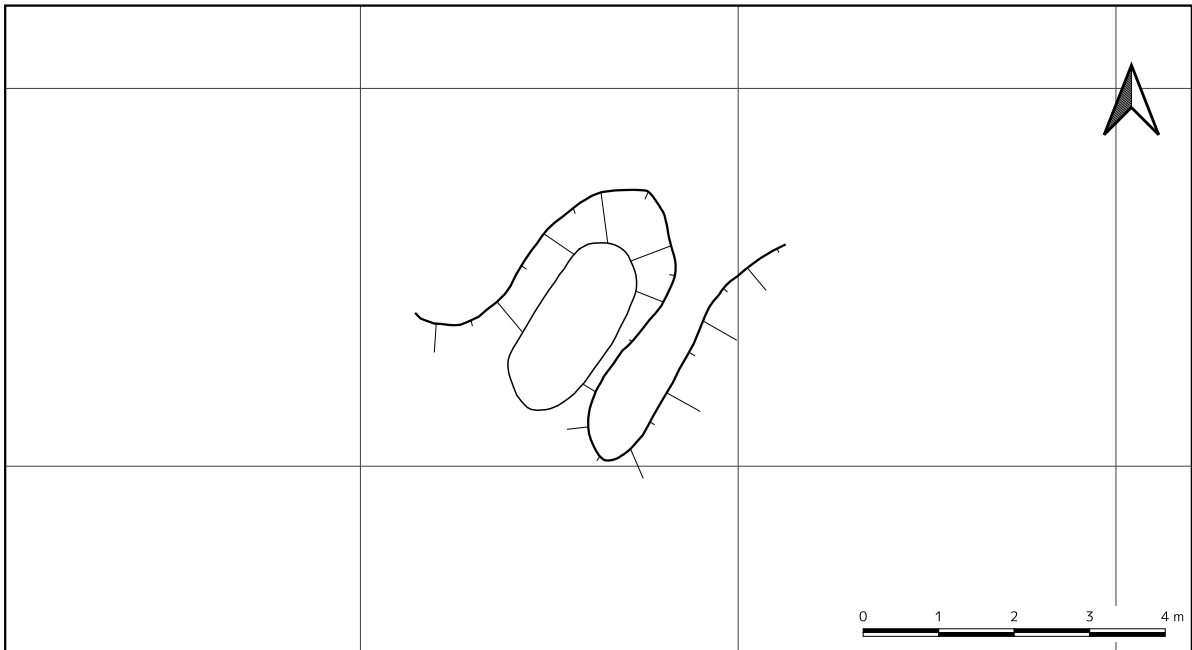


K03平面図

図4 川汲台塹壕配置図 (K01・K02・K03)



K04平面図



K06平面図

図5 川汲台塹壕配置図 (K04・K06)

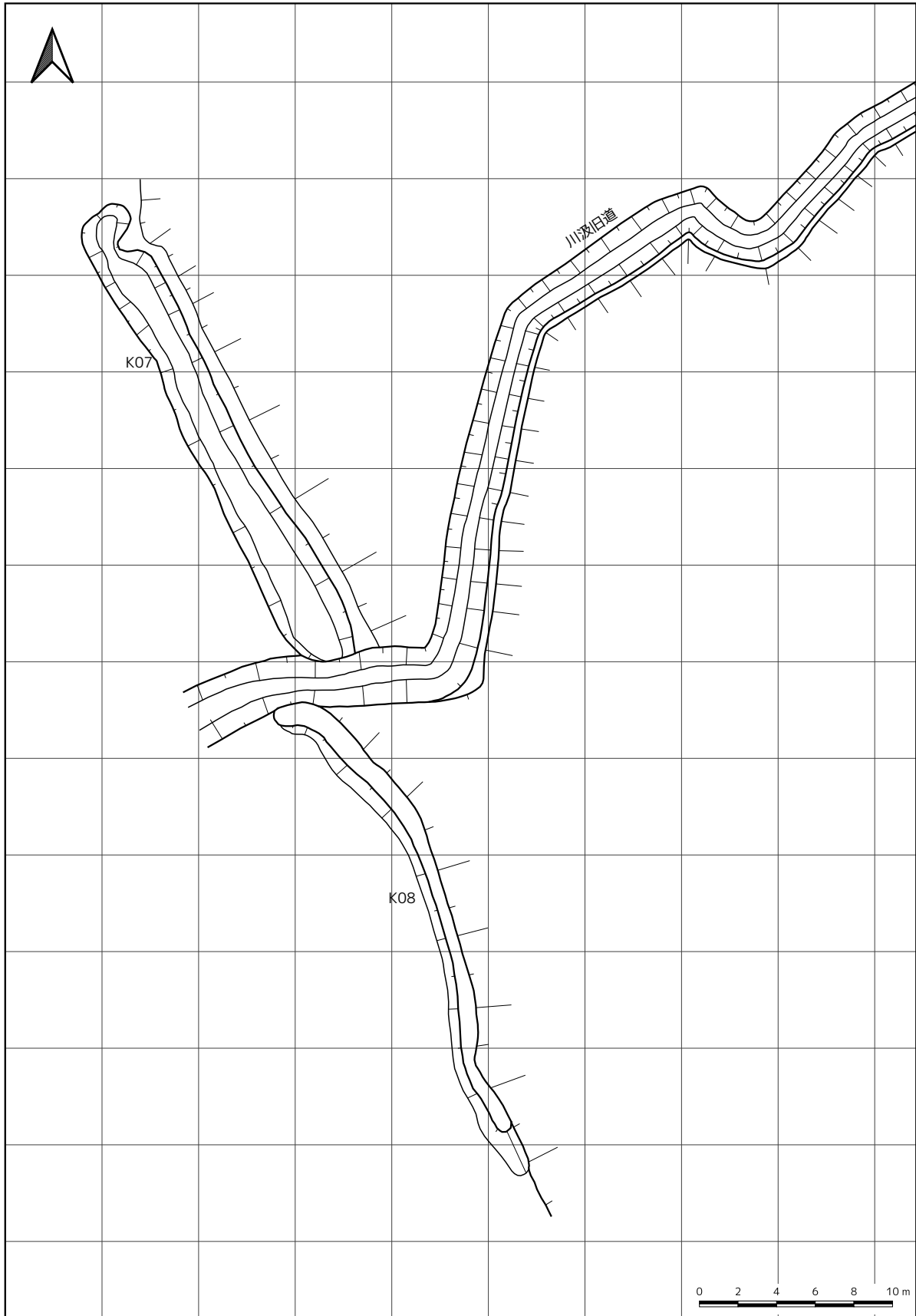
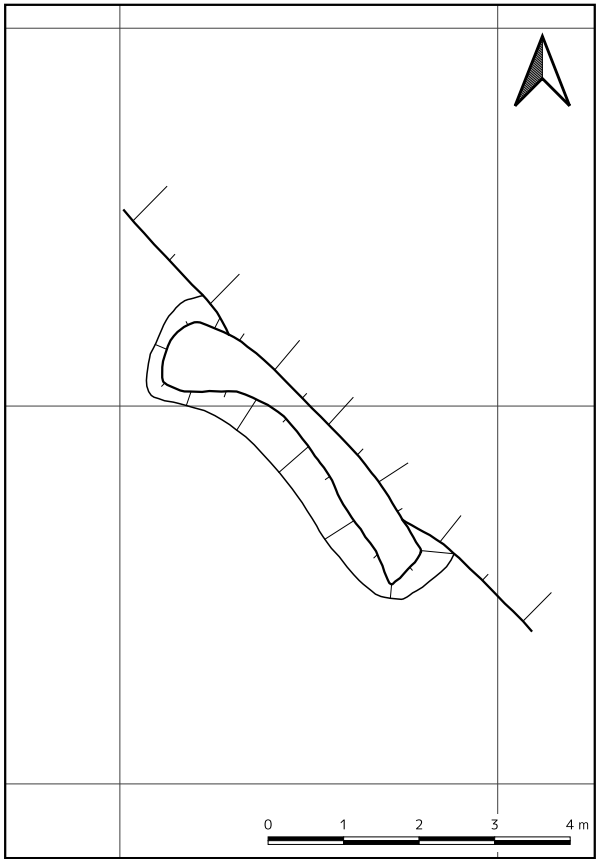
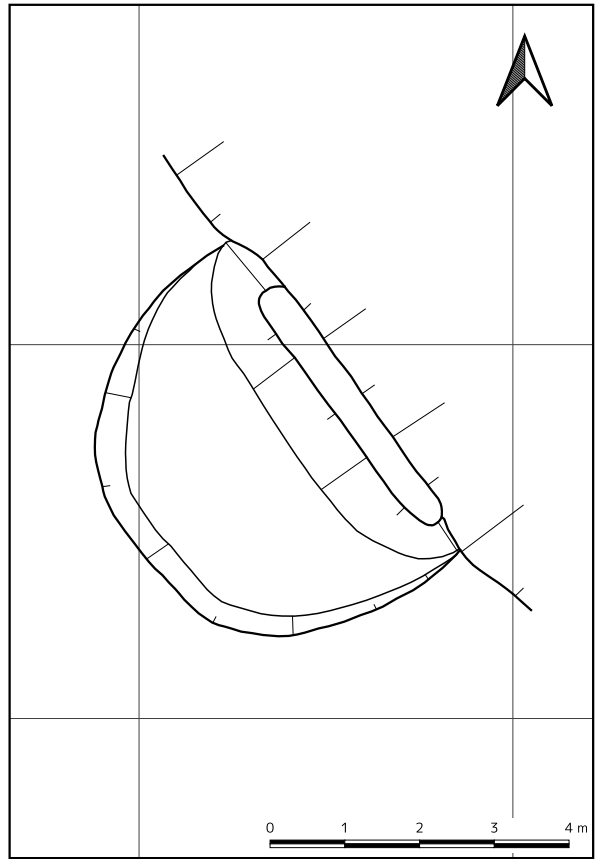


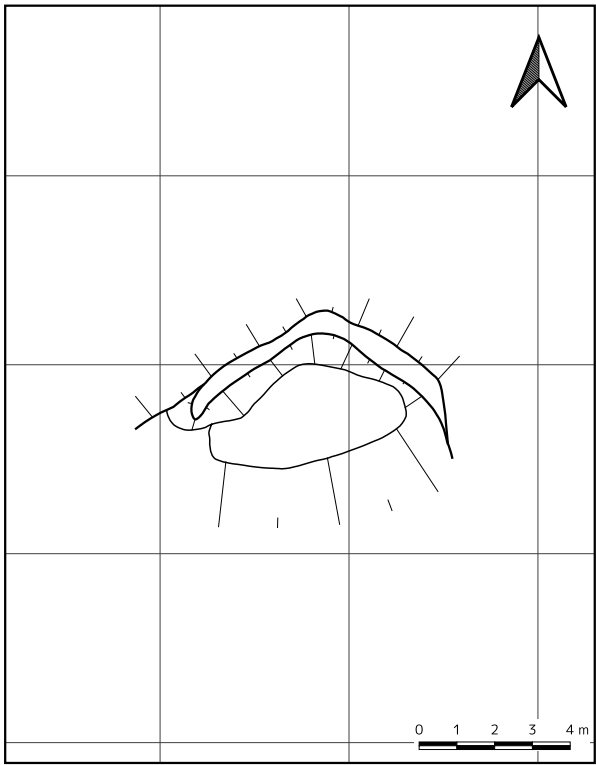
図 6 川汲台場塹壕配置図 (K07・K08・川汲旧道)



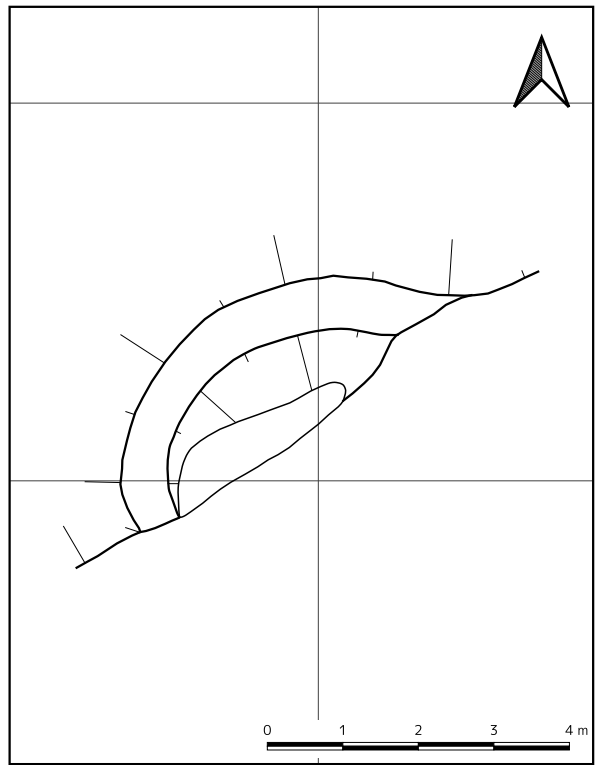
K09平面图



K10平面图

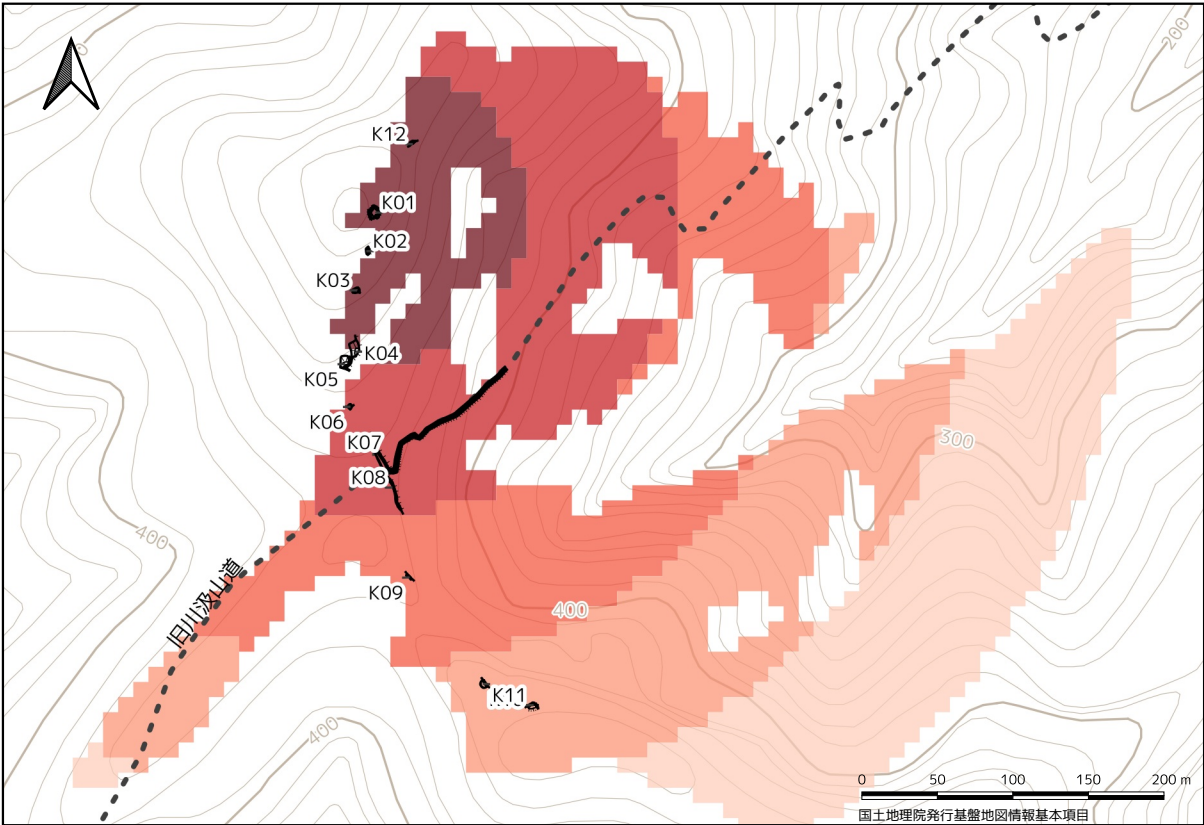


K11平面图

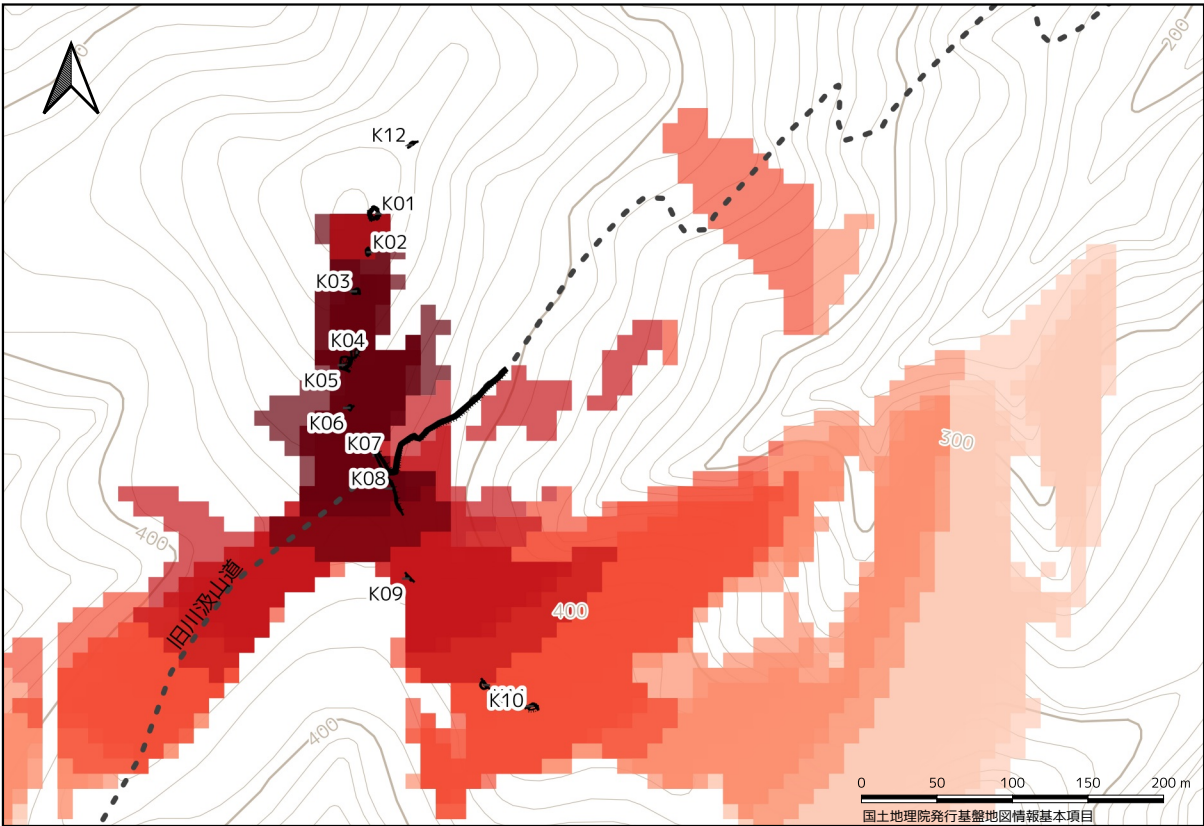


K12平面图

图7 川汲台塹壕配置図 (K09・K10・K11・K12)

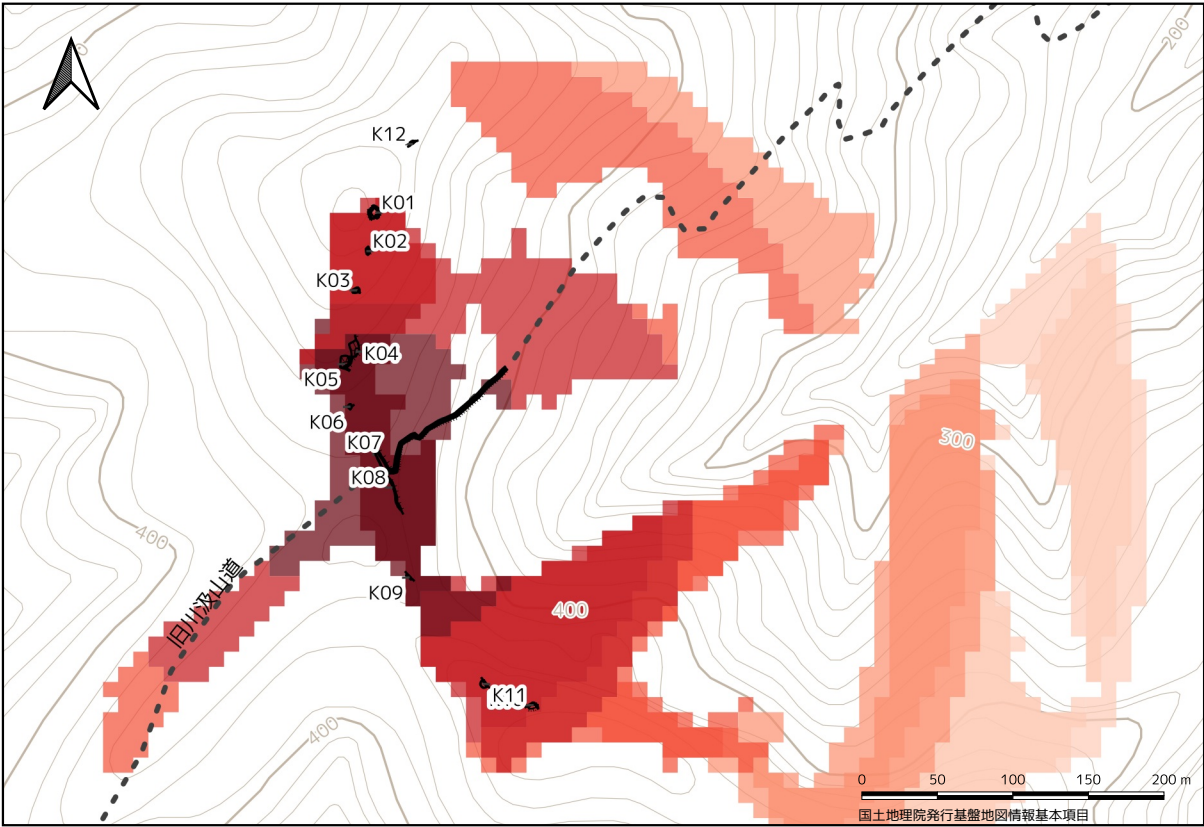


K01可視領域

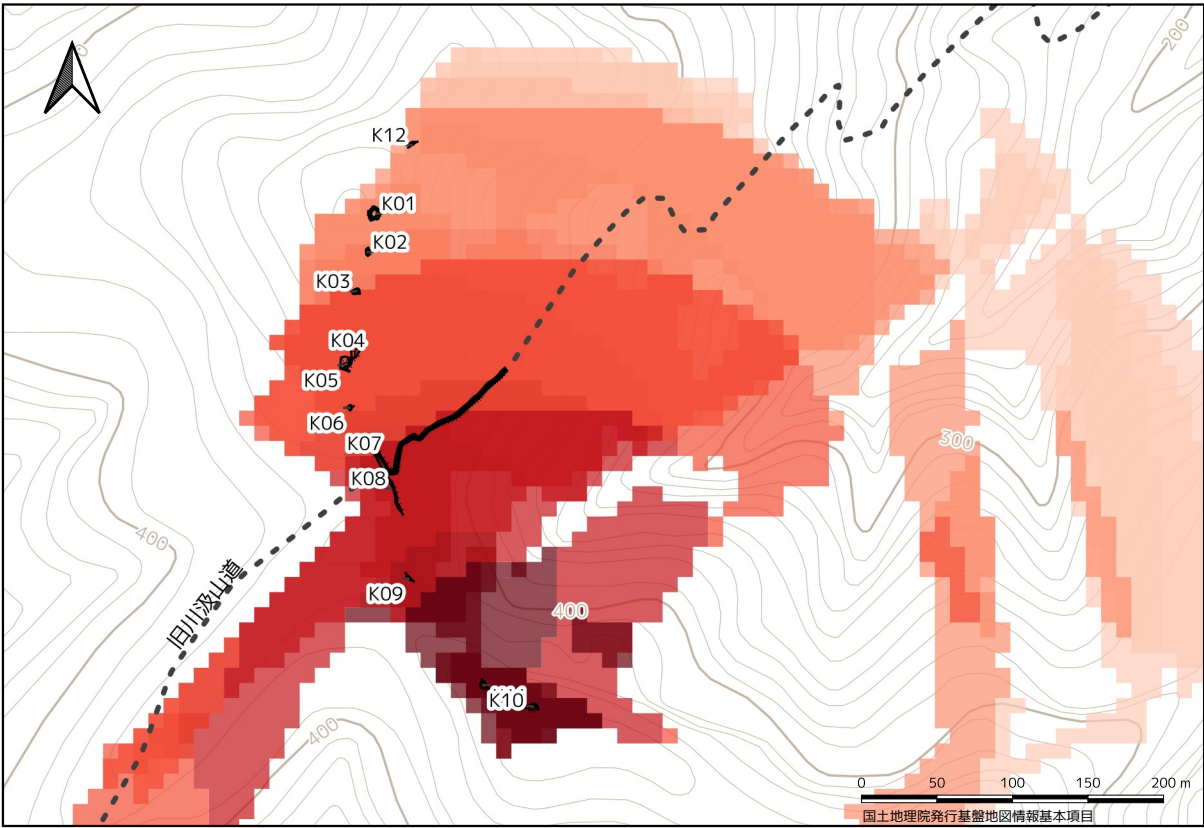


北側塹壕可視領域 (K02・K03・K04・K05・K06)

図 8 塹壕可視領域 (1)

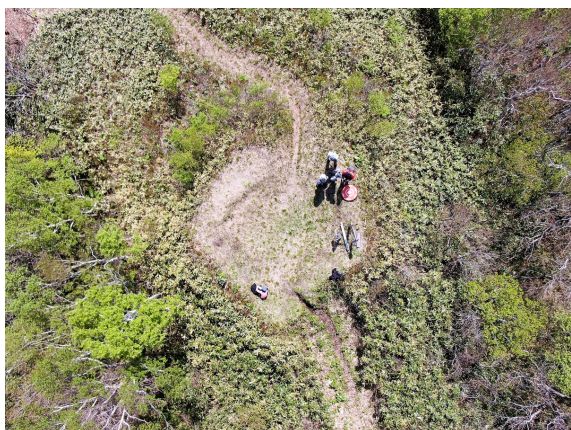


山道正面塹壕可視領域 (K07・K08)



南側塹壕可視領域 (K09・K10・K11)

図9 塹壕可視領域 (2)



K01



K02



K03



K04



K05



K06



K10

図 10 川汲台場塹壕調査状況（1）



K07



K08

図 11 川波台場塹壕調査状況（2）



川汲山道

図 12 川汲台場塹壕調査状況（3）